

ビオトープのいきものたち ―その37― 身近な里山に咲く野生ラン



さとやま自然史研究会
会長 神垣 健司

植物学者・牧野富太郎博士をモデルにしたNHK朝ドラ『らんまん』の影響で、植物に関心を持つ人がずいぶん増えてきました。そして植物の中でも別格の人気を誇っているのがラン科植物です。ランといえば珍しいと考えがちですが、意外と身近な里山にも多く自生しています。ランには独特の花を咲かせる種類も多く、興味は尽きません。今回は里山でよく観察できる野生ランを中心に、春から花が咲く順番に15種紹介します。なお、野生ランは菌との共生する種類も多く、野外で採取して栽培するのは難しいことが多いです。

・シュンラン

日本全国の里山に広く分布し、早春に花を咲かせることから「春蘭」と名づけられました。山野草として栽培されることも多く、頑強で育てやすいランでもあります。

・キンラン

北海道を除く日本各地に分布する地生ランで、ゴールデンウィークの頃に鮮やかな黄色い花を咲かせます。明るい雑木林などに自生し、菌根菌と共生しているために持ち帰っての栽培は困難です。

・エビネ

日本全国に広く分布するラン科植物の代表格、陽射しが差し込むような雑木林に自生します。かつてのエビネブームで乱獲が進みましたが、ブームも去り、近年では再び個体数が増え始めています。

・キエビネ

西日本を暖地の樹林帯に自生するエビネの仲間で、エビネよりも一回り大きくて豪華です。樹林の中で咲くキエビネはまるでそこだけ灯りがともったようで、自然の中で見ていただきたい野生ランです。

・カヤラン

本州・四国・九州に分布する日本固有のランで、樹木の幹や枝から垂れ下がるように生育する着生ランです。比較的よく見られる着生ランですが、高い空中湿度が必要で栽培は難しいとされています。

・シラン

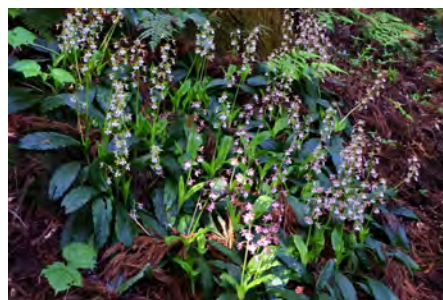
日本全国に広く分布する美しいランですが、栽培が容易なために栽培品として広く普及し、その種子が飛散して分布を広げています。野外にあるシランでも、自然分布ではない可能性が高いです。



シュンラン



キンラン



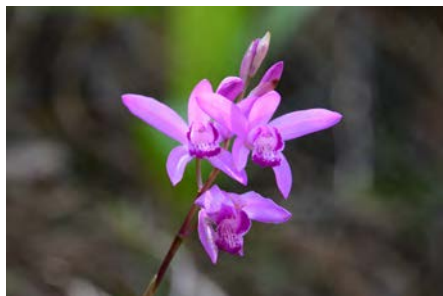
エビネ



キエビネ



カヤラン



シラン

・サイハイラン

北海道、本州、四国、九州の山地に分布する地生ランで、大きい株では花茎は50cmほどあります。東京・高尾山では山麓に多く自生するなど、出会う機会の多い野生ランです。

・セッコク

岩や樹上を白く彩る有名な着生ランで、本州・四国・九州に分布しています。栽培も比較的容易なことから多くの園芸品種がつくられていますが、野生種は過度な採取によって減少しています。

・ネジバナ

日本全土に分布し、低地から亜高山帯までの草地や湿地などに普通に生育しています。都会の芝生などにも見られ、最も身近な野生ランのひとつです。小さいですが、とても可愛い花を咲かせます。

・トキソウ

主に北海道と本州に分布し、陽当たりの良い湿地などに自生します。花色が絶滅危惧種の鳥・トキの羽色に似ていることから、「トキソウ」と名づけられました。

・カキラン

夏を代表する可憐な野生ランで、日本全国に広く分布します。陽当たりの良い湿地やその周辺の草地に自生し、和名は花色が柿の実の色に似ていることに由来します。

・ツチアケビ

日本各地の山地に自生し、菌類から養分を得る腐生植物です。夏に黄色い花を咲かせた後、ソーセージのような大きくて赤い果実をつけます。花よりも果実が有名な野生ランです。

・サギソウ

本州・四国・九州の陽当たりの良い湿地に生育し、栽培も容易な野生ランとして知られています。繁殖力の強い野生ランなので、湿地環境が良好であれば大きな群落をつくります。

・ミヤマウズラ

北海道・本州・四国・九州に分布する常緑の地生ランです。晩夏に、豚の鼻のような可愛い斑紋の花を咲かせます。名前は「深山」ですが、低山地に多く見られます。

・ミズトンボ

北海道から九州にかけての陽当たりの良い湿地に自生し、秋に花を咲かせます。花は緑白色で目立ちませんが、まるでエイリアンのようなユニークな形をしています。



サイハイラン



セッコク



ネジバナ



トキソウ



カキラン



ツチアケビ



サギソウ



ミヤマウズラ



ミズトンボ

キツツキの世界 その5

キツツキは何故自分の卵を捨てるのか？



アカゲラの巣作りを観察していた時の事です。突然コツコツという音が止んだと思ったら、何か白い物を咥えて顔を出しました。そして飛んで行ってしまいました。あっけにとられた私は何事が起こったのかしばらく茫然としておりました。

帰って来たアカゲラは何も咥えておらず、再び巣作りを始めたのです。巣が未完成の内に産んだ卵は捨てるのだろうか？

2020. 7. 9の朝日新聞に、笹森繁明さんのクマゲラが4個の卵を捨てたという記事が掲載されました。やはり巣が未完成だった事が原因ではないかというコメントが語られていました。

しかし別の例が有澤浩著の「クマゲラの森から」(1993年朝日新聞社刊)に載せられています。

クマゲラの巣を乗っ取ろうとするゴジュウカラがクマゲラの巣の入り口を粘土で小さくしようとし、帰って来たクマゲラがその粘土を取り除くというやり取りがあった中で、クマゲラが自分の卵を捨てたものでした。

樹洞の入り口を狭めるゴジュウカラ



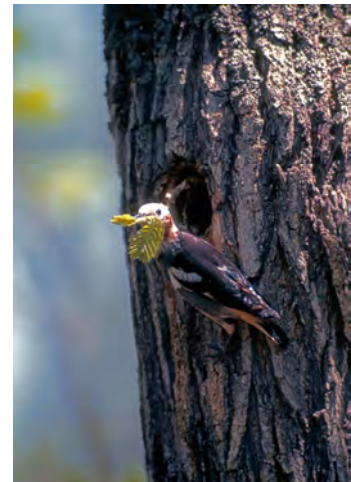
幌加内ビオトープ研究会代表
日本ビオトープ協会個人会員
内海 千樫

アカゲラの巣を乗っ取ろうとするのは、巣のサイズから言ってコムクドリです。

中にあるアカゲラを威嚇するコムクドリ♀



アカゲラの留守中に巣材を運び込むコムクドリ♂



アカゲラの巣の下に捨てられたコムクドリの卵



キツツキが巣作りを途中で止める理由は次の事が考えられます。

- ① 雄が巣作りを始めたが、つがい相手が見つからない。
- ② 白樺に作り始めたが、春先に樹液を大量に吸い上げるので、水びたしになるため。
- ③ 他の鳥に乗っ取られたため。
- ④ 不明

つがい相手が見つからず巣作りを断念したヤマゲラ♂



体の小さなコゲラとコアカゲラは生木には巣穴を掘れないので、かれて柔らかい木に巣穴を掘ります。

コアカゲラの巣作り



コゲラの巣作り



半身を突っ込んで掘り進めます。



木屑をくわえて後ずさりしてきます。



・お知らせ・
只今協会誌連載中の「キツツキの世界」を共同文化刊の写真集としてamazon及び書店で発売中です。

協会活動状況:各地区

全国8地区の地区委員会では、その土地に応じた様々な活動を活発に行っております。
今号では今年度の活動状況・計画や報告等についてお知らせいたします。

(2023年12月現在)

各地区委員会 計画・報告等

北海道・東北地区活動計画・報告 委員長 佐竹 一秀 (株式会社 エコリス)

1. 大槌町「ミズアオイの池をみんなで守る会」活動支援
・湧水エリア発芽促進かく乱作業(4/22) ・エリア内高木植栽作業(6/15～6/17イオン財団助成)
・ミズアオイ町民観察会と座学・試食会(8/20) ・次年度エコアップ計画・助成金申請獲得
・釜石根浜地区でのビオトープ計画支援活動(写真)
2. いわき市三和町「ホタル水路再生計画」の支援
・第1回ほたるのさんぽみちinみわ開催(三和町商工会主催:7/1)
・ホタルの生息調査・捕獲・小学校主催ホタル放流会の実施
・三和小学校児童によるカワニナの繁殖(継続実施)
・ホタル水路・ハナショウブ田の維持管理
3. 寒河江慈恩寺「ホタルの里プロジェクト」の支援
・マコモダケの苗の確保(4/15)と親子田植え体験会(5/20)
・ビオトープゾーンの生き物・植物観察会(6/10)・親子ホタル観賞会(7/7)
・マコモダケ親子収穫体験会/試食会・親子座学学習会
4. 尾花沢市「徳良湖」環境調査・清掃活動(4/30)
5. 大石田町「町民の森」環境調査・清掃活動(5/1)
6. ビオトープフォーラム2024in仙台に向けて
・地区委員会開催(10/12) ・会場下見等(10/31) ・拡大地区委員会開催(1/17,18予定)
7. 会員の拡大 2023年度個人会員1名入会(岩手県)



寒河江慈恩寺
マコモダケ田植え体験会



大槌町
根浜地区ビオトープ計画支援



寒河江慈恩寺
ビオトープゾーン生き物観察会

関東地区活動計画・報告 委員長 砂押 一成 (株式会社 砂押園芸)

1. ビオトープフォーラムin静岡2023 運営協力
2. 自治会・学校ビオトーププロジェクト継続支援実施
・前渡小 学校観察園ほたるの森 ホタル放流・観賞会(ひたちなか市)
・村松小ビオトープ ホタル放流・観賞会(東海村)
・常葉台ビオトープ ホタル観賞会 生物調査 3回(ひたちなか市)
・高野宿ビオトープ ホタル放流・観賞会 生物調査 3回
3. 地域ホタル飼育活動の継続実施
4. 目白が丘保育園ビオトープ支援
5. 赤羽幼稚園 園庭ビオトープ学習会実施(東京都港区)
6. Facebook等SNSを使った地区情報発信の継続での情報発信
※Facebook:「日本ビオトープ協会 関東支部」
7. 他団体との情報連携強化
8. 会員拡充 2023年度個人会員1名入会(神奈川県)



ミニビオトープ



インセクトホテル



生物調査

北陸・信越地区活動計画・報告 委員長 久郷 慎治 (株式会社 久郷一樹園)

1. 県内ビオトープ関連団体との交流及情報連携
・ビオトープ管理士会富山県支部との合同研修会
・富山県ビオトープ協同組合との先進地視察研修
・射水ビオトープ協会との勉強会
2. 会員の拡大 2023年度個人会員1名入会(富山県)
・隣県の石川県・新潟県への働きかけ
・BAを介した会員の勧誘



富山県ビオトープ協同組合
他との合同研修会



愛知県西尾いきものふれあいの里の視察研修

静岡地区活動計画・報告 委員長 藤浪 義之 (株式会社 藤浪造園)

1. 「ビオトープフォーラムin静岡2023」開催
・フォーラム2023.6.23、見学会2023.6.24
2. 麻機遊水地保全活用推進協議会の参加
・麻機遊水地グリーン作戦参加、自然観察会協力 2023.5.20
3. 麻機湿原を保全する会 活動支援
・サクラタデ観察会 2023.10.21
4. 「ホタル水路づくり研修会」への協力 2023.5.22、7.24、10.16、11.20
5. 中町浄水場里山再生 指導及び協力 2024.1月予定
6. 学校、福祉、企業ビオトープ維持管理支援
・小学校ビオトープ再整備 支援 2023.6月、11月実施
・児童福祉施設ビオトープ維持管理支援 2023.7月実施
7. 静岡地区会の開催 予定
8. 会員の拡大



サクラタデ観察会の様子



麻機遊水地 保全活動



イベント会場 ガマの垣根制作

中部地区活動計画・報告 委員長 青山 正尚（太啓建設 株式会社）

1. 中部ブロック会議の開催
SDGs AICHI EXPO 2023出展、BA認定・更新研修会の開催について、他
1回目:2023年6月18日 2回目:9月20日
2. BA認定・更新研修会の開催
日付 2023年10月26日(木)27日(金)
場所 豊田商工会議所会館
受講者:更新54名 新規16名
3. SDGs AICHI EXPO 2023 in Aichi Sky Expo 出展
日時 2023年10月5日(木)～7日(土) 10:00～17:00
会場 愛知国際展示場(Aichi Sky Expo)展示ホールA
出展116団体 来場者 約14,000人
4. 協会本『ビオトープづくりの心と技』の販売活動
5. 会員募集 法人・個人会員(法人会員1社 入会予定)



BA認定試験研修会・更新研修会の様子



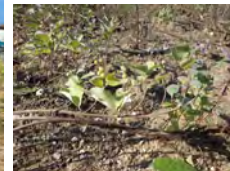
SDGs AICHI EXPO 2023出展の様子

近畿地区活動計画・報告 委員長 西川 勝（近江花勝造園 株式会社）

1. 盤石跡地調査 第2回8月調査
2. 蒲生の湯 小さなビオトープ池調査 第2回 10月
3. 竜王町貯水池 動物、植物調査・観察会 11月
4. 希望ヶ丘文化公園水辺観察会・調査5月～翌3月
(観察会1回・調査1回)
5. 琵琶湖岸ヨシ植栽とハマゴウ保全活動への協力
(6月・11月)
6. 会員拡大



ヨシ植栽 イベントへ協力



貴重種ハマゴウ保全活動(秋季)



中・四国地区活動計画・報告 委員長 梶岡 幹生（株式会社 カジオカL. A）

◇秋の古鷹山ビオトープ観察会の報告

- ・日時:2023年9月30日(土)10:00～12:00
- ・内容:生き物採集・観察、火起こし体験、焼き芋づくり、等
- ・講師:梶岡幹生、清田康博、越智一郎、山本信男、望月将実、中川ゆかり
- ・参加者:37名



生き物採集と観察

◇ご報告

株式会社カジオカL.A(梶岡幹生会長)を中心とした協会で、中・四国地区委員がメンバーの、古鷹山ビオトープ・フォローアップ実行委員会(広島県)の活動が高く評価され、公益財団法人社会貢献財団第60回社会活動貢献者として、11月27日東京帝国ホテルで開催された表彰式典で表彰受賞されました。



表彰式典

九州地区活動計画・報告 委員長 田中 和紀（内山緑地建設 株式会社 宮崎営業所）

1. 地域自治区・学校ビオトープの状況観察実施
2. 海岸浸食状況に歯止めをかける取組の確認・調査継続実施・ウミガメ生態観察・送り出し観察実施
3. 蛍の里環境清掃
4. 出で野山ほたる里水路(小林市)維持管理工法勉強会の計画
5. 南九州大学環境学部との意見交換会「知る・学ぶ・触れる」興味を持つ取り組みを図る計画
6. 会員拡充の継続呼びかけ



ホタル水路



作業風景



その4. 目黒区立駒場野公園

現在の目黒区駒場は江戸時代には幕府の領地で、将軍家のお鷹場(鷹狩場)だったそうです。その頃は、草地と雑木林の自然に疎らに人家と農地があり、人々の生活も武蔵野の自然に溶け込んでいました。現在のこの地は渋谷から井の頭線ではんの二駅目、駒場東大前が公園の最寄り駅です。教育や文化施設が多いとは言え、市街地が迫る都会の一面になっています。ここにご紹介します目黒区立駒場野公園は、つくばに移転した東京教育大学農学部の跡地にできました。面積4ha弱の規模の小さな公園ですが、その内容には興味深いものがあります。残された自然は里やまの要素で構成され、雑木林と草地と水域が見られます。林は植栽された樹木が多く、日本各県を代表する県木が植えられています。サクラの種類が集められ、時期には花見の人出でにぎわいます。昭和の初期までは駒場野の湧水を集めた清流空川(そらがわ)と呼ばれる目黒川の支流が流れていました。現在は暗渠となりましたが、公園の「ケルネル田んぼ」の水として利用するため、池に注がれ貯水されています。ケルネルさんはドイツの農芸化学の学者で、明治の政府の要請で来日して、日本の農業(学)の近代化に尽力した人です。ケルネルさんが実験した水田は現在も、筑波大学附属中・高校の生徒さんに受け継がれ、稲作が続けられています。その他の公園の管理はボランティアの人々との協働により支えられています。「駒場野ホテルの会」の人たちは、この里やまの環境の生きものを代表する指標は、ヘイケボタルであると考えています。現在の環境には生息できませんが、飼育により養殖したヘイケボタルの観察を通して、住民の方々と共に里やまの自然の保全と再生を強く訴えています。「森のみどり人」の人たちは林の樹木や雑草を管理し、間伐材からそだ柵をつくり、園内の区画や根まわりの保護に役立っています。「野の花クラブ」の皆さんは園内の植物を調べ、在来種を中心に野草園をつくり管理しています。

本文をまとめるにあたり、駒場野公園ボランティア・グループ「森のみどり人」、「駒場野ホテルの会」の皆さんよりお話を伺うことができました。また、公園の案内は「自然観察舎」が中心になりますが、自然解説員である岡本明久さんと佐藤多寿子さんにお世話いただきました。ありがとうございました。



図1. 渋谷より井の頭線に乗り、二駅先の駒場東大前で下車。西口を出て線路に沿って坂を上ると児童館があり、その隣の平屋の建物が「駒場野公園自然観察舎」で、公園のボランティア活動の拠点を担っています。



図2. この立派な扉の北門は、稲にトンボと雀をあしらった日本の水田をデザインしています。駅から北西方向の最も公園の奥に位置しますが、この門を入って間もなく左側に「ケルネル田んぼ」があります。



図3. 明治14(1881)年、当時の政府の招へいでドイツより来日したオスカル・ケルネルが使用した実験田と言われています。ケルネルは駒場農学校において農芸化学を教え、近代農学発展に寄与しました。



図4. 「大池」と呼ばれるこの池は、目黒川の支流空川(そらがわ)の水を貯めて、ケルネル田んぼにも利用されてきました。現在はプールなどの再生水を加え、水田の稲作に用いています。



図5. 園内の雑木林は高木から低木までの多層からなり、樹種も様々な種を含んでいます。都市の中で維持されている森林生態系として貴重な存在価値があります。



図6. 雑木林の中の日当たりの良い土地には、陽光を好む植物を集めた野草園があります。「野の花クラブ」の皆さんが管理して、コバノタツナミソウやホトトギスなど種々の季節の花が見られます。



図7. 「森のみどり人」の皆さんは雑木林が好きな人たちが集い伝統的な手法で樹木の手入れ、下草刈り、落ち葉かきなどに汗を流します。処理された木材はそだ柵や木炭にして利用されます。



図8. 「駒場野ホテルの会」の皆さんは、1950年代に消えたヘイケボタルを、この里やま環境を代表する指標種と考えています。ホテルの飼育と放生を通じて、駒場の自然保全に関心をもつことを望んでいます。



図9. この公園では「そだ柵」を使い人の自由な立入を制限しています。樹木の枯れ枝を束ねた簡単な柵ですが、容易に作れて効果があります。枯れ枝は昆虫などの棲み場となり、見た目にも違和感がありません。

日本ビオトープ協会設立30周年記念号「自然との共生を目指して…そして豊かな未来のために」Vol.2発刊にあたり、日頃よりご指導をいただいている顧問の先生、ご協力いただいている会員の皆様、これまで関わっていただいたすべての方々に改めて感謝申し上げる次第です。

さて、この間COP28が2023年11月から12月かけてアラブ首国連邦のドバイで開催され、GSTロス&ダメージ(各国の温暖化対策の取り組みの総点検・気候変動による悪影響による損失)への対策、脱化石燃料の加速化などが議題とされました。今後は、日本や先進国でも率先して気温維持を掲げニュートラルカーボンの実現を目指すことになります。

国内に目を向けると、地球沸騰化と言われるほどの酷暑、季節感の薄れ、線状降水帯によるゲリラ的な豪雨や、冬眠しない野生のクマの出没被害の多発など、気候の変化を感じざるをえない日々が続いています。

本号では当協会代表顧問の鈴木邦雄先生、顧問の立川周二先生、中川昭一郎先生、平塚明先生、元代表顧問・故杉山恵一先生奥様の杉山美智子様から回顧録的な意味も含めながらご寄稿をいただきました。この協会を様々な知見よりご指導いただいていることがうれしい限りです。

その他、青山先生の特別寄稿では「うなぎ」の貴重な研究についてご執筆いただきました。また、神垣様には「身近なラン」について、内海様には「キツツキ」についてご投稿いただきました。どれも素晴らしい内容でございまして、ぜひご活用ください。

編集委員:情報委員 若月学・砂押一成、正副総務相談役、本部事務局

《櫻井前会長ご逝去》 2011年から2023年6月まで協会会長を務めて来られた櫻井淳理事が、2024年1月1日ご逝去されました。ご功績に感謝し、心よりお悔やみ申し上げます。

自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。◇会員募集中◇

- | | |
|-------|--|
| 会員の種類 | ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人 |
| | ・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人 |
| 年会費 | ・法人正会員 100,000円 |
| | ・個人正会員 10,000円 |
| | ※10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。 |
| 会員の特典 | ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。 |
| | ・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。 |
| | ・その他、地区活動への参加など。 |

入会手続き、入会申し込み用紙については、WEBページ<https://www.biotope.gr.jp/application/apply/>または下記本部事務局までメールかFAXでお問い合わせ下さい。

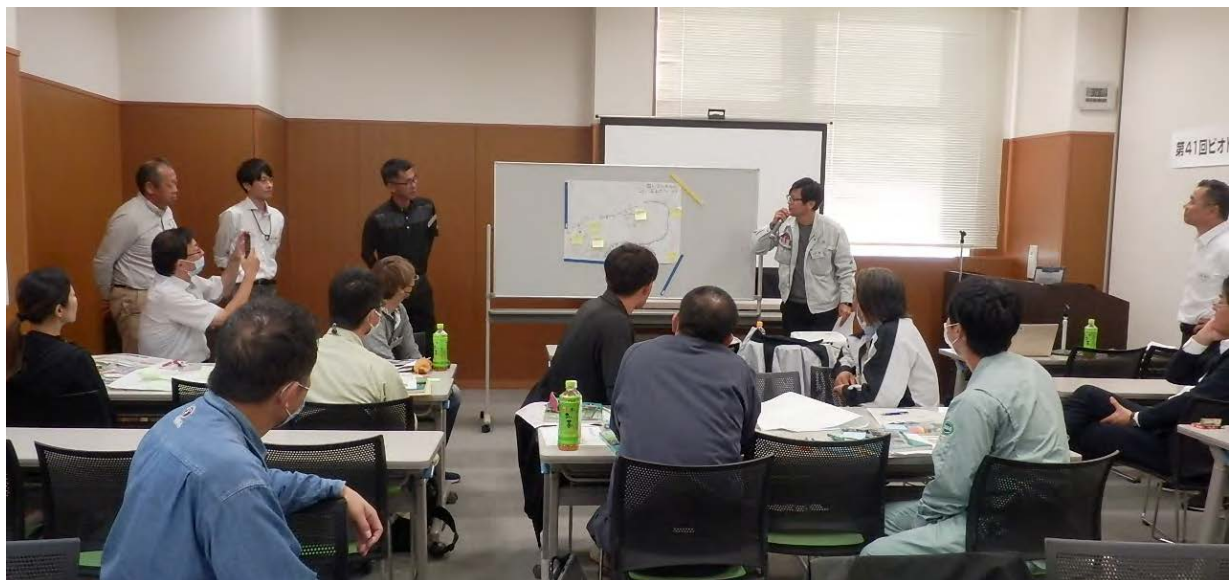
日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No. 53

2024年(令和6年)1月31日発行

発行所	特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会
発行責任者	久郷 慎治 (日本ビオトープ協会 会長)
編集	協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局
本部事務局	〒170-0005
	東京都豊島区南大塚2-6-7-101
	TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651
	E-Mail honbu@biotope.gr.jp
	URL https://www.biotope.gr.jp/

会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。



第41回ビオトープアドバイザー認定試験研修会
実践講座 ビオトープ計画書作成・発表
(愛知県豊田市)